

夢をくれる柳川のヒーロー



やながわ 柳川市長(福岡県) **か ね こ けん じ 金子健次**

初めて体験した喜びの川上り

柳川市長の金子健次です。市長就任14年目になります。今回は、柳川観光大使であり、私のメール友達でもある佐渡ヶ嶽部屋の秀ノ山親方を紹介します。

柳川名物の「川下り」。皆さんも写真などで1度はお目にかかったことがあるのではないのでしょうか。四季を通じて、水郷柳川を代表する観光資源として、訪れた多くの人に親しまれています。

平成23年の秋、通常の川下りとは反対に舟が進む「川上り」を初めて体験しました。柳川出身・琴奨菊関(現秀ノ山親方)の大関昇進を祝って、横綱に昇進してほしいと縁



大勢の人が駆け付けた大関昇進を祝う川上りパレード

起を担ぎ、「川上り・水上パレード」を実施したからです。舟団は、本場所の取組数にちなみ15隻。掘割沿いには市内外からたくさんの方が駆け付け、両岸から「大関昇進おめでとう」と小旗を振って「琴奨菊はすごかあ！郷土の誇りたい」と、筑後弁の歓喜の渦でした。この日は大関昇進を祝って柳川市民栄誉賞を琴奨菊関へ授与。また、副賞として柳川産米を体重と同じ174kg、福岡有明ノリ1年分を贈りました。

けがに負けずつかんだ初優勝

大関昇進後の琴奨菊関はけがとの闘いでした。平成25年11月場所ですべふちに倒れこんで、右胸上部を強打。病院で「右大胸筋断裂全治3カ月」と診断されました。また、膝や足首のけがもあり、本場所中は体をテーピングで何重にも巻き、痛々しい姿で土俵に上がっていました。けがで十分な稽古ができないときでも、大関としての責任を果たすため、土俵に立ち続けた琴奨菊関。その間5回のカド番に追い込まれ、大関から陥落する危機を何度も乗り越えてきました。

そんな琴奨菊関に転機が訪れたのは、新しいトレーナー塩田さんによるトレーニングを始めた頃。やかんのような形をした「ケトルベル」を持ち上げるなどして体幹を鍛えたそうです。塩田さんは「立ち合いは、相撲界一。あとは力の出し方を磨けば、ま

だ伸びるはず」と感じながら、琴奨菊関とトレーニングに励んできたそうです。

体幹を鍛えるようになってから、琴奨菊関の力強い相撲が復活。本人は「自分の相撲に自信が持てるようになった」と当時を振り返っていました。そして平成28年1月、両国国技館で開かれた初場所ですべふちを破り、日本人出身力士として10年ぶりとなる初優勝を勝ち取り、日本中の相撲ファンに感動をもたらしました。

令和3年12月2日、元琴奨菊関の秀ノ山親方から、5年間両国国技館に掲示されていた優勝額を本市へ寄贈していただきました。新たに完成した文化ホール「柳川市民文化会館」に飾らせてほしいと親方にお願いたしましたところ、市民に応援していただいた「感謝の気持ち」として快諾してもらったのです。

子どもたちに夢を

令和4年4月、秀ノ山親方を招いて「どすこい！柳川2022」が市内で開催されました。土俵の上に設置されたステージで、親方は「入門して半年で、体重が30kg落ちた」など修業時代に苦労したことや、「上へのし上がるには、苦しさも必要」など現役時代のエピソードを披露。また、「我慢して、納得するまで続けることが大事」と夢や目標を持つことの大切さを語ってくれました。



綱引きで子どもたちと交流する秀ノ山親方



優勝が決まった瞬間歓喜に沸くパブリックビューイング

柳川が生んだ 雲龍型の創始者 第10代横綱雲龍久吉

柳川出身の第10代横綱雲龍久吉。柳川市大和町の「雲龍の郷相撲ドーム」では、昭和63年から雲龍を顕彰する少年相撲大会を開催しています。毎年、県内各地や、佐賀、大分県などから小学生の男女約300人が参加。秀ノ山親方も小学5、6年生の時に出場し、優勝した大会です。この優勝を機

に、力士になることを決心した親方ですが、大会出場のきっかけは副賞のマウンテンバイクが欲しかったからだそうです。現役時代の親方は、九州場所の前にも関わらず、毎年佐渡ヶ嶽部屋の親方と若手力士と共に会場に来てくれていました。親方と若手力士は土俵で、一度に10人前後の子どもたちに胸を貸してくれました。

令和4年10月1日、親方の断髪式が両国国技館で行われます。案内がありましたので私も参加します。土俵の上では、「ありがとうございます」と感謝の気持ちを含めて、大銀杏鬘にハサミを入れようと思います。



支えてくれた市民に感謝を伝えようと寄贈を受けた優勝額（筆者・左端）



毎年胸を貸してくれる地元のヒーローに子どもたちは大喜び